

NEWS RELEASE

キヤノン株式会社
キヤノンマーケティングジャパン株式会社

4K 放送用カメラ対応ポータブルズームレンズ“CJ20e×5B”を発売 ハイエンドユーザー向けの「UHDxs」シリーズのラインアップを拡充

キヤノンは、2/3 型センサー搭載の 4K 放送用カメラに対応するポータブルズームレンズの新製品として、広角ズームレンズ“CJ20e×5B”を 2020 年 12 月下旬に発売します。



CJ20e×5B
(倍率 20 倍／焦点距離 5～100mm)

“CJ20e×5B”は、2/3 型センサー搭載の 4K カメラに対応する高い光学性能を持つ、光学性能を重視したハイエンドユーザー向けのポータブルズームレンズ「UHDxs」シリーズの広角ズームレンズです。広角端 5mm と高倍率 20 倍ズームを両立しながら、シリーズの特長である高い光学性能を備え、スポーツ中継や各種番組制作のロケなど、多彩なシーンにおいて、臨場感あふれる高画質な映像表現が可能です。キヤノンは、4K 放送用カメラに対応するポータブルズームレンズのラインアップを拡充し、幅広いユーザーの要望に応じていきます。

■ 幅広い焦点距離を一本でカバーする広角端 5mm と高倍率 20 倍ズーム

“CJ20e×5B”は、スタジアムの全景や広大な景色などの撮影に適した広角端 5mm を実現しながら、使用頻度の高い焦点距離も幅広くカバーする高倍率 20 倍ズームを両立しています。また、2 倍のエクステンダーをレンズ本体に内蔵しており、ズーム域を 2 倍に切り替えることで望遠端 200mm までの撮影領域でも、高精細な映像表現ができます。

■ 小型・軽量の筐体で高い機動性と操作性

4K 光学性能を持ちながら、質量約 2.24kg^{※1}、外形寸法約 166.3 (幅) ×110.8 (高さ) ×251.7 (長さ) mm と、HD 放送用カメラ対応レンズと同等の小型・軽量の筐体 (きょうたい) を実現し、報道やドキュメンタリーなどの分野に求められる高い機動性を確保し、撮影者の負担を軽減します。

■ 4K 放送用カメラに対応する高い光学性能

蛍石、UD レンズ^{※2}、スーパーUD レンズ^{※2}を採用し、それらを最適配置する独自の光学設計技術により、色にじみや色収差を良好に補正し、ズーム全域で画面中心から周辺部まで優れた色再現性を実現しています。

製品名	希望小売価格	発売日
CJ20e×5B	オープン価格	2020 年 12 月下旬

※1 IASE S の場合。IRSE S の質量は約 2.16kg。IASE S はフォーカスサーボ有、IRSE S はフォーカスサーボ無。

※2 「UD (Ultra Low Dispersion = 特殊低分散) ガラス」を用いたレンズ。スーパーUD レンズは、UD レンズの性能をさらに向上させたレンズ。

- 一般の方のお問い合わせ先 : キヤノンマーケティングジャパン株式会社 03-3740-3304 (直通)
放送・新聞営業部
- 放送・業務用映像機器ホームページ : canon.jp/bctv

<主な特長>

1. 幅広い焦点距離を一本でカバーする広角端 5mm と高倍率 20 倍ズーム

- ・ キヤノンの 4K 放送用カメラ対応ポータブルズームレンズとして最広角の「CJ15e×4.3B」(2020年1月発売)、「CJ14e×4.3B」(2018年8月発売)に次ぐ広角端 5mm を実現しながら、使用頻度の高い焦点距離も幅広くカバーする高倍率 20 倍ズームを両立。スタジアムの全景や広大な景色などの撮影に最適。
- ・ 広角端 5mm と最至近撮影距離約 0.4m により、スペースの限られた場所や被写体に接近した撮影が可能。
- ・ 2 倍のエクステンダーをレンズ本体に内蔵し、ズーム域を 5~100mm から 10~200mm に切り替え可能。また、エクステンダー使用時も 4K カメラに対応する高い光学性能を実現。

2. 小型・軽量の筐体で高い機動性と操作性

- ・ 4K 光学性能を持ちながら、質量約 2.24kg、外形寸法約 166.3 (幅) × 110.8 (高さ) × 251.7 (長さ) mm と、HD 放送用カメラ対応レンズと同等の小型・軽量の筐体を実現。報道やドキュメンタリーなどの分野に求められる高い機動性を確保。
- ・ 人間工学に基づいたグリップ設計により、優れた操作性を実現し、長時間肩に担いで撮影する撮影者の負担を軽減。

3. 4K 放送用カメラに対応する高い光学性能

- ・ 非球面レンズの最適配置、多群ズーム方式の採用により、ズーム全域で画面中心から周辺まで高い解像力とコントラストを達成。
- ・ 蛍石や UD レンズ、UD レンズの性能をさらに向上させたスーパー UD レンズを最適配置することにより、色収差を良好に補正し、色にじみや輪郭の色づきを抑えた高画質を実現。
- ・ インナーフォーカス方式を採用。フォーカス変動を抑制して近距離から遠距離まで高画質を達成。
- ・ カメラ側に備えられている ITU-R BT.2020^{※1} 色域の映像の色収差を高精度に補正する機能に対応し、ITU-R BT.2020 ベースの色収差補正データを搭載。4K カメラ^{※2} 装着時に画面の隅々まで高い色再現を可能にし、より高品位な画づくりに貢献。
- ・ HD 対応の放送用カメラに装着して使用する場合でも、より高画質な映像を撮影可能。

※1 ITU (国際電気通信連合) 策定の UHDTV 放送方式の映像信号を規定する勧告。HDR/WCG に対応。

※2 全てのカメラに色収差補正機能が備わっているわけではありません。

4. 優れた操作性を実現する高機能デジタルドライブユニット

- ・ 高分解能 16bit 絶対値エンコーダーを採用した高機能デジタルドライブユニットを搭載。高精度な位置検出が可能のため、実際の映像とバーチャル映像を合わせる際に容易にキャリブレーションが可能。
- ・ 絶対値エンコーダーの採用により、ドライブユニットに電源が供給された際に、初期化の動作をせずに、カメラ側の色収差補正機能や位置検出、ビューファインダー上の位置表示が可能。
- ・ 20PIN 端子を 3 カ所に備えることで、ズーム/フォーカスコントローラー (ともに別売り) の両方を使用した場合でも、バーチャルシステム用信号出力端子を確保することが可能。
- ・ ドライブユニット上に情報ディスプレイを搭載。各種機能を簡単に設定、調整、操作可能。
- ・ 2019年4月に発売したズームデマンド「ZDJ-GN1」[※]、フォーカスデマンド「FDJ-G01」^{※1}への対応はもちろん、ユーザーが使い慣れている従来のキヤノン製デマンド^{※2}にも対応。

※1 スタジオレンズ用アクセサリも使用可能。但し、変換ケーブルが必要。

※2 ズームデマンド「ZSD-300D」、「ZSD-380D」、「ZDJ-D02」、「ZDJ-P01」、「ZDJ-S01」(国内未発表)、フォーカスデマンド「FPD-400D」、「FPM-420D」、「FFC-200」、「FC-40」、「FFM-100」、「FDJ-G01」、「FDJ-S01」。但し、「ZDJ-D02」、「ZDJ-P01」、「ZDJ-S01」、「FDJ-G01」、「FDJ-S01」は、変換ケーブルが必要。

<ご参考：4K放送用レンズのラインアップについて>

キヤノンは、世界最高※1倍率6.7倍を実現した国産初※1の放送用ズームレンズ「フィールドズームIF-I型」（1958年発売）から半世紀以上にわたり、高性能レンズを通じて映像業界のイノベーションに貢献してきました。4K化という大きな変革期を迎えた今も、その姿勢に変わりありません。たゆみない研究から生まれた最先端の光学技術と、メカニカル技術、材料工学、生産技術を融合し、厳しい評価試験を経て操作性と信頼性を確立しています。

より美しい映像を求め、見えなかった世界を目にしたいという人の願いは不変です。キヤノンは、その願いと、4K化という時代の要請に、先進のレンズテクノロジーで応えるとともに、業界最多※2の4K放送用レンズのさらなるラインアップの拡充を進め、制作現場の多様なニーズに応えていきます。

業界最多 17本の4K放送用レンズのラインアップ

製品名		発売年月
UHD-DIGISUPER 122		2019年4月
UHD-DIGISUPER 111		2019年2月
UHD-DIGISUPER 90		2016年2月
UHD-DIGISUPER 86		2016年5月
UHD-DIGISUPER 66		2018年8月
UHD-DIGISUPER 27		2017年3月

スタジオ／フィールドズームレンズ 計6本

カテゴリー	製品名	発売年月
UHDxs シリーズ	CJ45e×13.6B	2018年4月
	CJ45e×9.7B	2018年3月
	CJ25e×7.6B	2019年2月
	CJ20e×7.8B	2016年6月
	CJ20e×5B	2020年12月（予定）
	CJ15e×4.3B	2020年1月
UHDgc シリーズ	CJ24e×7.5B	2018年6月
	CJ18e×7.6B	2018年11月
	CJ14e×4.3B	2018年8月
	CJ18e×28B	2019年6月
	CJ15e×8.5B	2019年7月

ポータブルズームレンズ 計11本

※1 1958年発売当時。キヤノン調べ。

※2 2020年9月24日現在。キヤノン調べ。

<放送用レンズの市場動向>

日本や欧米諸国では、デジタルテレビ放送の普及に伴う放送機器のHD化がほぼ完了し、日本国内では2018年12月より新4K8K衛星放送が開始され、4K対応機材の導入がさらに加速しつつあります。一方、新興国では、今後デジタル放送への完全移行が予定されている国も多くあり、HDTV放送用機材の需要も継続して見込まれるとともに、4K放送への関心も高まっています。（キヤノン調べ）

<主な製品仕様>

製品仕様の詳細は、ホームページをご参照ください。